

魯迅の「進化論から階級論へ」についての 覚え書（下）

中 井 政 喜

I. はじめに

II. 魯迅の進化論について

一、初期文学活動（1903 - 1917）における進化論の内容

二、中期文学活動（1918 - 1927）における進化論の内容（以上前号）

三、後期文学活動（1928 - 1936）における進化論の内容（以下今号）

III. さいごに

II. 魯迅の進化論について

三、後期文学活動（1928 - 1936）における進化論の内容

「進化論在魯迅后期思想中的位置——從翻譯普列漢諾夫的《芸術論》談起」（周展安、『中国現代文学研究叢刊』2010年第3期、総134期）は、該論文の結論部分で次のよう述べ、後期における魯迅の進化論の内容を総括的に指摘する¹⁾。

「これまでに、私たちは魯迅後期の思想における進化論の位置という問題に部分的に答えた。いわゆる『答えた』とは、私たちが次のことを解明したことを指す。第一に、進化論は魯迅後期思想において基本的に、自然科学的内容とされて把握された。そして第二に、自然科学としての進化論は、肯定的な在り方で魯迅の後期思想の中にずっと存在した。しかし第三に、進化論は主要な対象として魯迅に注目されたのではなく、後期魯迅の注目の重点となったのは、マルクス主義思想学説を主要な内容とする社会科学

である。」(「進化論在魯迅后期思想中的位置」、105頁、前掲)

私はこの優れた論文を参考とし、自分なりの考えを以下に述べることにする。

1. 魯迅重訳によるマルクス主義文芸理論の中の進化論と国民性

①魯迅重訳によるマルクス主義文芸理論の中の進化論

1928年から始まる革命文学論争にともない、魯迅はマルクス主義文芸理論と本格的に接触し始め、そこから受容するところがあった²。魯迅が日本語文献から重訳したマルクス主義文芸理論の中で³、進化論はどのように位置づけられ、言及されていたのだろうか。

「芸術について」(プレハーノフ、『芸術論』、外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18、魯迅入手年月日、1928・11・7、『芸術論』、蒲力汗諾夫、魯迅重訳、1929・10・12訳了、光華書局、1930・7、引用文の底本は第7刷(1929・10・3))は次のように言う⁴。

「一般的に言って、私によって擁護されつつある歴史観〔唯物史観を指す——中井注〕にダーウニズムを対立させようとするのは、非常に奇異なことである。ダーウインの領域は全く他にあった。彼は、動物種としての人間の起源を考察したのである。唯物史観の支持者はこの種の歴史的運命を説明せんと欲する。彼等の研究の領域は丁度ダーウイニストの研究の終わるところ、其処から始まる。彼等の研究はダーウイニストが吾々に與える所のものに、とって代わることは出来ない、それと全く同様にダーウイニストの最も輝かしい発見も、彼等の研究にとって代わることは出来ないが、ただ彼等の為に地盤を準備することが出来るのみである。(中略)ダーウインの学説は正に然るべき時に、生物学の発達における大なるまた必然的な進歩として現れた、当時この科学がその研究者達に提出しえた限りの要求中の、最も重要なものを完全に満足させることによって。何等か同様のことを唯物史観についても言うことが出来るか？彼は正に然るべき時に社会科学の発達における、大なるまた必然的な進歩として現れたと断言することが出来るか？そしてそれは、今やその一切の要求を満足せし

むることが可能であるか？これに対して私は十分なる確信をもってこう答える、然り、——出来る！然り……可能である！」（『芸術について』）

プレハーノフは、生物学における進化論（ダーウィニズム）の発展の到達点を基礎として、すなわち進化論者による生物としての人類進化の研究を地盤として、そこを出発点として、人類社会に対する史的唯物論（唯物史観）の研究が始まるとする⁵。

またルナチャルスキーは、「芸術論と社会」（ルナチャルスキー著、『マルクス主義芸術論』、昇曙夢訳、白揚社、1928・7・30、魯迅入手年月日、1928・9・3、『芸術論』、盧那卡尔斯基、魯迅重訳、上海大江書舗、1929・6、1929・4・22訳了）で次のようにいう。

「生存競争において、積極的有機体が被動的有機体に勝り、進歩的有機体が単なる順応的有機体に勝ることの疑うべからざる優越性を基礎として、次のように仮定することが出来る。（確信を以って肯定する事が出来るかどうかは怪しいが。）すなわち、力の生長そのもの、生命の進歩そのものは、積極的興奮に伴われる。即ち、あらゆる有機体には、力に対する渴望、生命の生長に対する渴望が固有していると。これを特に人間の進歩的なタイプに関して云うならば、このような進歩の要求は、最早疑う余地がない。」（『芸術論と社会』）

ルナチャルスキーは、ここで生物の進化論（例えば、生存競争、生命の進歩）を基礎・前提として、芸術に関する生理学的な解釈を展開していると思われる。

以上の引用から、プレハーノフにおいて、生物の進化論の到達点は、そこから史的唯物論が始まる出発点・前提であった。言い換えれば、生物の進化論を社会分析に適用し、或いはそこに組みこんで、社会変革の道筋・方法を導くことはできない。そうした役割を果たしうるのは史的唯物論である。また、ルナチャルスキーの「芸術論と社会」（『芸術論』、前掲）において、生物の進化論はルナチャルスキー自らの芸術論の基礎であり、前提であった。言い換えれば両者において、生物の進化論は自然科学としての

領域内において（社会科学・人文科学の領域ではなく）、真理であると認識され、彼らの議論を展開する前提となされていたと言える。

②魯迅重訳によるマルクス主義文芸理論の中の国民性

国民性の問題について、プレハーノフは「芸術について」（プレハーノフ、『芸術論』、魯迅重訳、1929・10・12訳了、前掲）において次のように言う。

「スタール夫人の意見によれば、国民性は歴史的条件の所産であるということに注意することだ。しかし国民性は、若しもそれが与えられた国民の精神的特質の中に現れたものとしての人間の本性でないとしたら、何であるか？

そして若しも所与の国民の本性がその歴史的発展によって創造されるならば、それがこの発展の第一動因であり得ないことは明らかである。がここからは文学——国民的精神的本性の反映——はこの本性がそれによって創造される歴史的条件そのものの所産であるということが出て来る。それは人間の本性ではなく、与えられた民族の性質ではなく、彼の歴史および彼の社会的構造が彼の文学を説明することを意味する。この観点からスタール夫人はフランスの文学を観察してもいるのである。彼女によって十七世紀のフランス文学に献げられた一章は、この文学の主たる性質を当時のフランスの社会・政治関係と、その帝王権に対する関係の中に観察されるフランスの貴族階級の心理とによって説明しようとした、極めて興味ある試みである。」（『芸術論』、61頁）

「あらゆる与えられた民族の芸術は彼の心理によって規定される、彼の心理は彼の状態によって創造される、が彼の状態は究極において彼の生産力と彼の生産関係によって条件づけられる、と。」（『芸術論』）

プレハーノフは、国民性が第一動因ではなく、歴史的諸条件の所産であり、歴史的発展によって作りだされるものであるとする。文学は、或る国民の本性ではなく、また民族の性質ではない。それは、歴史的諸条件と社会的構造によって生みだされた国民の本性と民族の性質の反映であると説明さ

れる⁶。

中期文学活動の中で、1926年三・一八惨案の頃まで、魯迅は中国人の国民性の改革を中国変革（或いは社会改革）の主要な課題とした。国民性はそれ自体が第一動因とされ、根本的課題と考えられて、啓蒙の対象とされた⁷。そののち、1926年三・一八惨案以降、中国変革の課題における緩急の観点から、国民性の改革の課題は後景に退き、軍閥支配体制（1927年4月12日以降の蒋介石による新たな支配体制を含めて）の打倒とそれに対する抵抗が、中国変革の当面の最大の課題として魯迅によって位置づけられたと思われる⁸。そして1929年頃、魯迅が重訳したプレハーノフの見解によれば、或る時期或る社会に国民性自体が存在するとしても、しかしその国民性は第一動因ではなく、歴史的諸条件と社会的構造の所産として説明されている。1926年三・一八惨案以降、魯迅はなお国民性の改革を中国変革の最も根本的課題（第一動因として）としながらも⁹、この惨案の体験に基づいて、すなわち中国変革の課題における緩急の観点に基づいて、軍閥支配体制の打倒を優先する選択をした。しかしここでのプレハーノフの見解は、史的唯物論の解釈に基づく見解である。すなわち魯迅は1929年頃初めて、史的唯物論による国民性に関する基本的解釈を学び、国民性を第一動因とする誤りを認識したと言える。

2. 後期の雑文における進化論と国民性の問題

①後期の雑文における進化論

魯迅は、「〈硬訳〉与〈文学的階級性〉」（1930・3発表、『二心集』）で、ダーウィンの生物の進化論について、次のように言う。

「私は伝達者が決して同情によるのではなく、世界を改造する思想のためであるはずと思う。まして『元もとそのものがない』ものは、自覚のしようがなく、激発のしようがない。自覚し、激発できるなら、それは元もと有ったものであることは明らかである。元もと有ったものであるから、ながく隠蔽することはできない。例えばガリレオが地動説を述べたように、

ダーウィンが生物の進化を唱えたように、彼らは当初或いは宗教家に焼き殺されそうになり、或いは保守派から攻撃を強く受けなかつただろうか。しかし現在人々がこの両説に対して、決して奇としないのは、地球は結局動いており、生物も確かに進化しているためである。」(「〈硬訳〉与〈文学的階級性〉」)

ここで魯迅は、生物が進化していることを事実とし、それゆえにダーウィンの生物の進化論も当初の保守派の攻撃にもかかわらず、真理として認められていることを言う。

また、「〈論語一年〉」(1933・8・23、『南腔北調集』)では、ダーウィンについて次のように言う。

「生物が進化していることは、ダーウィンによって明らかにされ、私たちの遠い祖先と猿とが親戚であることを教えられた。(中略)この同じく猿の親戚の中で、ダーウィンは偉大であると言わなければならない。その理由は簡単で、しかもありきたりである。それはダーウィンが猿の親戚の家柄であることを決して忌みはばからず、人々が猿の親戚であることを指摘したからである。」(「〈論語一年〉」)

魯迅は、ダーウィンを偉大であるとする。なぜならダーウィンは生物が進化していることを明らかにし、彼自身が猿の家柄であることを忌みはばからず、人々が猿の親戚であることを明らかにしたためである。ここでも魯迅は、生物(人類)が進化していることを事実として議論の前提にしている。

上の二つの例に基づけば、魯迅はダーウィンの生物の進化論を真理として擁護している¹⁰。では、前期の進化論と異なるところはどこにあるのだろうか。魯迅は、「喝茶」(1933・9・30、『准風月談』)で次のように言う。

「感覚の細やかさや鋭さは、麻痺していることに比べれば、当然進歩と言える。しかし生命の進化に有益であることを限界とする。もしもそれと関わりなく、さらには有害であるならば、進化の中の病態であり、やがて結末が来ることになる。」(「喝茶」)

魯迅は、人々の感覚の進歩が生命力の衰退につながるがあると指摘する。感覚の細やかさや鋭さの進歩は、生命力の進化に有益であることを限界とする。

ここで魯迅は、進化論に基づいて論を立て、感覚の細やかさと鋭さの進歩と、生命力の進化の関係について述べている。そしてここでの進化論が前期の進化論の提起と異なるところは、中国変革（或いは社会改革）の道筋・方法と直接的に結びついて論じられた進化論ではない、すなわち第二の様相の進化論ではないことにある。

「論秦理斎夫人事」（1934・5・24、『花辺文学』）で、子供とともに自死した秦理斎夫人について、魯迅は次のように言う。

「人はもとより生存しなければならない、しかしそれは進化のためである。苦しみを受けることもかまわない、しかしそれは将来のあらゆる苦しみを取りのぞくためである。さらには闘わなければならない、しかしそれは改革のためである。他人の自死を責める者は、人を責めながら、他方でまさしく人を自死の道に駆りたてる環境に対して挑戦し、攻撃しなければならない。もしも暗黒の主力に対して一言も述べることなく、一矢も発することなく、しかし〈弱者〉に対してはくどくどしく言うのであれば、たとい彼がいかに義憤を顔に表そうとも、私はこう言わざるをえない——私もまことにこらえきれない——彼は実際には殺人者の共犯者にすぎない、と。」（「論秦理斎夫人事」、傍点は省略）

ここに見られる旧社会の弱者に対する同情は、中期文学運動における旧社会の弱者に対する同情と変わりがない。魯迅は中期において、「主犯なき無意識のこの殺人集団の中で」（「我之節烈観」、1918・7、『新青年』第5巻第2号、1918・8・15）、すなわち中国旧社会の中で、抑圧される弱者・幼者の運命に大きな同情を注いだ。

後期において魯迅は、旧社会において自死にまで追い詰められた弱者に同情した。それとともに、旧社会に対して一言も抗議することなく、他方で弱者の自死を責める「進歩的評論家」を批判する。こうした態度は中期・

後期に一貫していると言える。そしてここでの、「人はもとより生存しなければならない、しかしそれは進化のためである」とする考え方と、追い詰められた弱者の自死を弁護する姿勢は、人道主義を基礎とする進化論による発言であり、中期と共通する。しかしそれは中期とは異なり、共通点はそこまでにとどまる。後期のここでの人道主義を基礎とする進化論は、中期におけるように前の世代の自己犠牲による社会改革という、社会改革（中国変革）の道筋・方法と直接には結びつけて論じられていない。

魯迅は唐英偉宛て書簡（1935年6月29日）で次のように言う。

「現在或の人が物事をしようとすると、必ずや大道理をもって非難する人があります。例えば『木刻版画の最終の目的と価値』がそれです。この問題の回答が不可能なことは、『人の最終の目的と価値』に回答不可能なのと同じです。しかし私は思います。人は進化の長い鎖の一環であり、木刻版画もそのほかの芸術と同じで、それは長い道においてその環の役割を果たし、奮闘、向上、美化の様々な行動を助けるのです。木刻版画、人生、宇宙の最後の究極はどのようなものであるのかについて、現在回答することのできる人はいません。永久であるのかも知れませんが、滅亡するのかも知れません。しかし私たちは、『滅亡するかも知れない』ゆえに行わないことはできません、ちょうど私たちは人自身が必ず死ぬことを知っていて、それでもご飯を食べなければならないように。」（唐英偉宛て書簡）

魯迅は、人間やものごとを歴史的に長い進化の鎖の一環として考え、その中間物としての役割（肯定面と否定面をもった存在の役割）を果たすことを言う。これは進化論を前提にして中間物としての役割を、すなわち社会の進歩のために果たす木刻版画或いは個人における両側面の役割（肯定的面と否定的面をもった存在の役割）を言ったものと思われる。

同日の頼少麒宛て書簡（1935年6月29日）で魯迅は、社会進歩のために果たす木刻版画（連環画〈木版版画を使った連続絵物語〉）の役割の方向を示して、次のように言う。

「『連環画』は確かに大衆に有益です、しかしまずどのような図絵であるの

かによります。すなわちまずこの図絵はどのような人に見せるのかを見定めなければなりません。構図、彫り方はそれによって異なります。現在の木刻版画は、まだ知識人に対して作ったものが多いです、ですからもしもこの彫り方を『連環画』に用いるなら、一般の民衆はやはり見て理解できません。

絵を見るにも訓練が必要です。19世紀末の絵画の流派は、言うまでもありません。きわめて普通の動植物の図であっても、私はかつて図絵を見たことのない村人に見せたことがあります、彼らは分かりませんでした。立体的なものが平面に変わることに、このようなことがありうることを彼らは万一にも思いつくことができません。ですから私は連環画を彫るときに、多く旧画法を採用しなければならないと主張するのです。」(頼少麒宛て書簡)

連環画を普及させることについて、魯迅はそれを中国変革論の道筋・方法と直接には結びつけてはいない。しかし魯迅は、連環画の図絵が民衆に見せるものであるなら、民衆に理解できるものでなければならないことを主張する。ここから連環画は民衆に対する啓蒙の手段として考えられていたことが分かる。すなわち連環画の民衆に対する普及は、中国変革の一分野における啓蒙的活動・闘争として考えられていたと思われる。言い換えれば、中国変革運動の各分野における役割、すなわち政治闘争、経済闘争、理論闘争の諸分野の中での役割を考えたいので、この場合、理論闘争の一環として民衆に対する啓蒙運動(連環画、木刻版画の普及)を行う魯迅の考えを述べていると思われる¹¹⁾。

また、人間の存在を歴史的に長い鎖の一環としてみることに、すなわち進化論的に見ることには、前・後期に一貫している共通部分がある。しかし前期において、科学の普及と啓蒙のための第一の様相の進化論とともに存在する、第二の様相の進化論は、初期においては人の自立(「立人」という精神革命(中国変革の方法)に結びつき、中期においては、前の世代の犠牲による後の世代の解放、或いは青年文学者の育成、大きく言えば思想

改革という、社会改革（中国変革）の道筋・方法に組みこまれ、直接的に結びついていた。これと比較して、後期における魯迅の進化論は、生物学の進化論として限定されている。すなわち第一の様相の進化論を前提・基盤としつつ、中国変革の道筋・方法については、別の領域の社会科学において探求する姿勢が見られる。すなわち上の場合、連環画や木刻版画の果たす役割について、中国変革の理論闘争分野の中での役割（民衆に対する社会科学的な啓蒙）を考えていると思われる。後期の魯迅の思想構成全体における進化論に対する位置づけには、前期とことなる大きな変化・発展があると言える。

また、個人の役割について言えば、初期には、優れた個性をもった個人（「人」）、「精神界の戦士」等が顕彰された。「精神界の戦士」の心声によって大衆の「内曜」が輝かされ、大衆は覚醒する。

中期には、進化論に基づく長い鎖の世代の中で、その一環として目覚めた個人の役割は、社会改革（中国変革）の道筋・方法に組みこまれた。後のよりすぐれた世代（あとから起こる生命）のために、目覚めた前の世代（知識人）は自己犠牲的に奮闘することが求められた。或いは1924年以降魯迅個人の生き方として、そのような自己犠牲的奮闘が実際になされた。

後期には、史的唯物論（生物の進化論を基盤とし、そこを出発点とする社会科学）に基づいて、個人の活動は中国変革の広い活動分野（政治闘争、経済闘争、理論闘争という階級闘争の諸分野）の中の一つの役割、一環に位置づけられ、その闘争をとおして中国変革に資するものとされている。

上記のことをまとめると、中期の1926年三・一八惨案以前において、魯迅は国民性の改革を中国変革の最重要の課題として、あとから起こる生命（前の世代に比べていっそう大きな価値・意義をもつ世代、子供・青年）の解放を前の世代の犠牲によって図ろうとし、或いは青年学生に対する啓蒙、青年文学者の育成を図ろうとした。そのことをつうじて社会改革を実現しようとし、社会改革に貢献しようとした。そのため中期における第二の様相の進化論は、社会改革（中国変革）の道筋・方法に直接的に適用さ

れていると言える。こうした第二の様相の進化論は、すなわち中国変革の道筋・方法に適用される進化論は、1927年四・一二クーデターを契機に破綻した。

1928年以降の後期においては、進化論は生物学における進化論、自然科学としての進化論の位置に限定された。それは、第一の様相の進化論がこれまでの前期の過程をへて螺旋状に発展した段階で、新たな魯迅の全体的思想構成の中で規定されたものと考ええる。

後期の中国変革における個人の活動（上の連環画の普及活動のように）は、中国変革活動のための一分野における、長い鎖の中の一環としての役割を社会科学的に位置づけられた。それは中期におけるように、進化論が中国変革の道筋・方法に直接組みこまれて、第二の様相の進化論となり、前の世代の自己犠牲的活動を主張したり、それに基づいて自ら実行するものではなかった。後期の進化論は、後期の魯迅の思想構成全体の中で新しい位置におかれた。すなわち後期の進化論は、前期におけるように、第一の様相をもつ進化論と第二の様相をもつ進化論が並流することがなかった。

②後期の雑文における国民性

前述のように、1929年頃、魯迅が日本語訳本から重訳したプレハーノフの見解によれば、或る時期或る社会に国民性自体が存在するとしても、しかしその国民性は第一動因ではなく、歴史的諸条件と社会的構造の所産として説明されている。ゆえに魯迅が中国人の国民性をそれ自体として取りあげることは、国民性が問題として現実に存在する以上、後期においても当然ありえた。しかし魯迅は、国民性の問題が第一動因ではなく、歴史的社会的諸条件の産物であるという前提のもとに、国民性の問題を取りあげていると考える。その結果、魯迅が文中において歴史的社会的諸条件の分析をすることなく、国民性それ自体として取りあげることは、前期に比べてはるかに少ないし、あるとしても、それは上述の前提のもとに言及されている、と私は考える。後期における国民性のとらえ方は、史的唯物論という新しい思想的枠組みに基づいて限定され、位置づけられた¹²⁾。

魯迅は、尤炳圻宛て書簡（1936・3・4、『魯迅全集』第13巻、1981）で次のように言う。

「日本人の国民性は、確かに良いものです。しかし最大の天恵は、蒙古の侵入を受けていないことです。私たちは大陸に生まれ、早くに農業を営み、ついには遊牧民の害をつぎつぎと受けました。歴史上血痕に満ちておりますが、今日までもちこたえてきましたのは、実際偉大なことです。しかし私たちはなお自分の欠点をあばかなければなりません、その意図は復興にあり、改善にあります……」

ここで魯迅は、国民性の存在を認めている。そして魯迅は中国社会の歴史的社会的諸条件をあげ、その所産としたうえで、現在の中国人の国民性の問題を取りあげている。

中国民衆の散沙のような状況について、魯迅は「沙」（1933・8・15、『南腔北調集』）で次のように言及する。

「近頃の読書人はいつも、中国人が散沙のようであって、考えるべき方法もないと慨嘆し、運の悪い責任をみんなに帰している。実際これは大部分の中国人に無実の罪を着せるものだ。」（「沙」、1933・8・15、前掲）

魯迅は、民衆が必ずしも散沙でないとする。民衆は自身の利害にかかわるとき、実際に行動して、請願し蜂起し謀反したとする。そして現在でも民衆の請願の類が存在する。

「それでは、中国には沙はないのだろうか。あることはある、しかし小民ではなく大小の支配者である。

人々はまたよく次のように言う、『昇官発財〔出世と金儲け——中井注〕』と。実はこの二つは並列されるものではない。昇官しようとする理由は、ただ発財しようとするためであり、昇官は発財の道にすぎない。だから官僚は朝廷に依存しながらも、決して朝廷に忠ではない。吏役は役所に依存しながらも、決して役所を大切にしない。頭領が清廉の命令を出すと、手下は決して従うことがない。対処の方法には『蒙蔽〔欺くこと——中井注〕』がある。彼らはすべて私利私欲の沙であり、己を肥やすことができるとき

には肥やす。しかもどの一粒も皇帝であり、帝を称することができるところでは帝を称する。或る人々はロシア皇帝を『沙皇〔ツアー——中井注〕』と呼ぶが、これをこのやからに送れば、きわめてふさわしい尊号である。財はどこから来るのか。小民の身から削ぎおとすものである。小民が団結しうるなら、金儲けは面倒なことになる。それで、当然できるだけ方法を考えて、彼らを散沙に変化させなければならない。沙皇によって小民を治める、そこで全中国は『一皿の散沙』となった。』（「沙」、前掲）

1933年において、魯迅は中国の民衆は必ずしも散沙ではないとする。民衆は自身の利害のために請願し、蜂起し、謀反した。しかし散沙のような大小の沙皇（支配者層）によって民衆が巧妙に分断して統治され、搾取されている。その結果、全中国（民衆を含めて）が散沙の状況を呈している、とする。中国の大小の支配者層による巧妙な分断統治を指摘する。

ここにおいて魯迅は、全中国の現状の散沙のような状況について民衆の国民性自体に原因を求めるのではなく、すなわち国民性を第一動因としてみるのではなく、歴史的諸条件と当時の社会状況を分析し、そこに発生の原因を求め、歴史的社会的所産としての中国の散沙の現状（国民性として表れる）を論じていると言える。ここにはマルクス主義（この場合の史的唯物論）を受容した魯迅の新しい姿勢が明瞭にうかがわれる¹³。

また、国民性自体についての指摘は、「“立此存照”（三）」（『中流』第1巻第3期、1936・10・5、『且介亭雜文末編』）に次のように言う。

「中国人は決して『自分を知る』明がないのではない。欠点はただ、或る人々が『自分を騙す』ことに安んじて、ここから『人を騙し』たいと考えることにある。たとえば病人が、浮腫を患っているが、しかし病気を隠して治療を嫌う。しかし他人がでたらめで、彼が肥っている、と誤解するように願う。妄想が長くなると、時には自分でも肥っているようで、決して浮腫ではないと考える。たとえ浮腫であっても、特別な良い浮腫であり、みんなとは違うと思う。（中略）私はいまでもスミスの《支那人気質》を訳す人がいるように希望している。これらを見て、自省し、分析し、どの点

が正しく言われているのかを理解し、改革し、抵抗し、自ら工夫し、他人の諒解や称賛を求めずに、結局どのようなものであるのが中国人であるか、を証明するのである。」（「“立此存照”（三）」、前掲）

ここではあたかも魯迅が国民性自体を第一動因として論じているように解釈ができる。しかし後期におけるこれまでの経過からして、魯迅は、国民性が歴史的諸条件と社会構造の所産であることを前提にして、すなわち第一動因ではないことを前提にして、そのうえで現在結果として存在する国民性の問題を取りあげ、理性的な自省を促している、と私は考える。言い換えると、魯迅は社会科学に基づく中国変革を展望し、それを担うと想定される変革主体の問題として（中国変革における第一動因として国民性を問題とするのではなく）¹⁴、国民性の問題を提起している、と私は考える。そしてそれは決して魯迅にとって軽々しい問題としてあつかわれたものではなかった。

3. 史的唯物論に基づく階級論の承認と社会科学の必要性

①階級論の承認

魯迅は「〈硬訳〉与〈文学的階級性〉」（1930・3発表、『二心集』）において、梁実秋の議論に対してプロレタリア文学論（「無産者文学理論」）に基づいて逐一詳細に反論を行っている。

「梁実秋氏は先ず、無産者文学理論の誤りは、『階級の束縛を文学に加えるところにある』と考える。なぜなら資本家と労働者は、異なるところがあるが、しかし同じところもあるからである。『彼らの人間性（この三字には本来圈点があった）は決して異なるところがない』、例えば喜怒哀楽があるし、恋愛（しかし『言うところのことは恋愛自身であり、恋愛の方式ではない』）がある、『文学はこの最も基本的人間性を表現する芸術である。』」（「〈硬訳〉与〈文学的階級性〉」）

上のような梁実秋の議論に対して、魯迅は次のように反論する。

「文学は人間を借りずに、『性』を表しようがない。ひとたび人間を用い

れば、しかも人間はなお階級社会に存在するので、決して所属する階級性を免れることができない。『束縛』を加える必要はなく、実は必然による。もちろん、『喜怒哀楽は、人の情なり』である。しかし貧乏人には決して取引所を開いて元手を割る悩みがないし、石油王は石炭ガラを捨てる北京の老婆の苦しみを知るはずもない。」(「〈硬訳〉与〈文学的階級性〉」)

魯迅によれば、文学が『基本的人間性を表現する』場合、それは人間を描くことをつうじて表現される。人間は階級社会に生活するので、その所属する階級性を帯びることを免れることができない。そうした階級性は、無産者文学理論が外から文学に付け加えるものではなく、本来、階級社会に生活する人間それ自体に備わっているものである。

こうした魯迅の反論からすれば、1931年当時、魯迅が史的唯物論による社会像(経済を基本的動力として階級によって構成される社会)に対する理解をもっていたことは明らかと思われる¹⁵⁾。

②社会科学の必要性

魯迅は、自然科学における生物の進化論を前提にしたうえで、社会科学(とりわけマルクス主義)の知識の必要性を主張する。『『進化和退化』小引』(1930・5・5、『二心集』)で魯迅は、周建人の著書『進化和退化』を紹介して、次のように言う。

「これは訳者が十年来訳した百篇近くの文章の中から、あまり専門的でなく、みんなが読むことのできるものを選び集めて、広く流布することを希望した本である。第一に、ここから最近の進化論学説の状況を見ることができる、第二に、ここから中国人の将来の運命を見ることができる。」(『進化和退化』小引)

ここで紹介される進化論の学説の歴史は、簡単ではあるが、しかし否定的に紹介されてはいない。また、中国農村の飢饉によって、農民は飢餓状態に陥り、樹皮をはぎ、草の根を掘ることによって、飢えを防ごうとする。樹木保護法は違反する農民を罰し、その結果逆に樹皮をはぎ草の根を掘る農民を増やしているとする。

「そのためこのような樹木保護法は、その結果樹皮をはぎ、草の根をほる人を増やしており、かえって砂漠の出現を促進している。しかしこの本は自然科学を範囲としており、そのためここまで配慮していない。この自然科学の論じた事実に引き続いて、さらに解決を図るものには、社会科学がある。」(『進化和退化』小引)

砂漠の出現を食い止めようとする自然科学の知見に基づく法律が、中国旧社会において、本来の意図とは逆のものに転化した例を挙げる。そして砂漠の出現を食い止めるためには、自然科学の論ずる事実に基づいて、そのうえで社会科学による分析と対策が必要であるとする。こうした論じ方は、生物の進化論を前提とし、そこを出発点として、社会分析における史的唯物論の役割を展開した、「芸術について」(前掲)におけるプレハーノフの論じ方と類似している。

「我們要批評家」(1930・4発表、『二心集』)で、魯迅は、1928年からの革命文学論争において、革命文学派によるマルクス主義文芸理論の不正確な紹介とそれに基づく偏った議論が、青年読者を失望させたことを指摘し、読者が社会科学の正確な理解を求めていることを述べる。

「この苦い教訓を得たあとで、転じて根本的で、適切な社会科学に治療を求めるのはもちろん、正当な前進である。

しかし、大部分は市場の要求であるため、社会科学の訳著はまた一時に湧きたっている。比較的読むことのできるものと全くだめなものが、露天の本屋に雑然と並んでおり、正しい知識を探し始めた読者たちはすでに恐れ、困惑している。しかし新しい批評家は口を開かず、批評家に類似するやからが機に乗じて一筆に抹殺して言う、『犬や猫ども』と。

ここにおいて、私たちが必要とするのは、数人の堅実で、賢明な、真に社会科学とその文芸理論を理解する批評家以外にはない。」(「我們要批評家」、1930・4発表、前掲)

魯迅は、堅実で、賢明な、真に社会科学とその文芸理論を理解する数人の批評家が必要なことを指摘する。

『『文芸与批評』 訳者附記』（1929・8・16、『訳文序跋集』）で魯迅は次のように指摘する。

「私はまた次のように思う、豁然として分かるようになろうとするならば、やはり社会科学というこの大きな源泉に力を入れなければならない。なぜなら千万言の論文は、学説に深く通じ、しかも全世界のこれまでの芸術史を理解したあとで、環境という情勢に応じて、曲折して出てきた支流にはかならないからである。」（『『文芸与批評』 訳者附記』、1929・8・16、前掲）

ここでも魯迅は、社会科学という源泉の研究に力を入れる必要性を指摘する。

Ⅲ. さいごに

以上のように、私は次のような問題について自分なりの考えを提出した。

①前期の進化論はどのような過程をへて、後期の進化論に変容したのか。②魯迅における前期の進化論と後期の進化論は、どの点で異なるのか。国民性の改革にかかわる魯迅の考え方の変化が、上の点とどのように関係するのか。③魯迅は後期において、生物学の進化論と史的唯物論をどのような関係として考えたのか。

大まかに自分なりの考えをまとめて言えば、次のように言うことができる。

魯迅の前期の文学活動における進化論は基本的に二つの様相をもっていた。第一の様相の進化論は、生物学の進化論という自然科学的な知識、自然科学的考え方を普及し啓蒙する性格のものである。第二の様相の進化論は、第一の様相の進化論を基礎として、民族革命（中国変革）或いは社会改革と直接的に結びついて現れる進化論である。

1907年、自然科学の生物進化論としての「人之歴史」（1907、前掲）の紹介に表れた、第一の様相の進化論が、民族革命（中国変革）を展望する第

二の様相の進化論の基礎的部分となった。すなわち第一の様相の進化論が民族革命に融合し、徐々に組みこまれ基礎的部分となって、第二の様相をもつ進化論が精神革命（人の自立）と結びついて出現した。その後中期においても、第二の様相の進化論は、思想改革（精神革命）と結びつき、前の世代の自己犠牲的行動の主張等として出現する。すなわち前期をとおして両者は並流している。しかし、1927年の四・一二クーデターをへて、第二の様相の進化論は破綻した。

1928年以降、マルクス主義を本格的に受容して以後、第一の様相の生物の進化論は、自然科学として限定され、自然科学とは別の領域の社会科学に基づく中国革命を展望するうえで、それは自然科学的な基礎部分となった。すなわち1928年以降の生物の進化論は、前期文学活動における第二の様相の進化論のように、直接的に社会改革（中国変革）の道筋・方法に融合し組みこまれなかった。1928年以降の生物の進化論は社会科学とは別の領域の、基礎的自然科学の一部として存在した。後期の進化論は、初期文学活動における第一の様相の進化論が、初期・中期の諸経過をへながら継続・発展してきたのち、後期の魯迅の新しい思想構成全体の中に組みこまれて限定され位置づけられた、第三の様相をもつ進化論であると言える。すなわち後期の進化論は、前期の第一の様相の進化論が前期をつうじて螺旋状に発展して、1927年四・一二クーデターによる第二の様相をもつ進化論の破綻ののち、1928年以降魯迅の新たな思想構成全体の中に位置づけられたものである。

今後の私の課題は、瞿秋白の指摘する魯迅が進みはいつとする「階級論」（『魯迅雑感選集』序言、前掲）について、それがどのような内容のものであったのか、また後期における人道主義がどのような内容であり、どのように位置づけられたのか、を追究することにある。このことについて、稿を改めて考えることにしたい。

*1:「魯迅与進化論」(錢理群、『中国現代文学研究叢刊』1980年第2期、前掲)は、魯迅の後期におけるダーウィンの進化論とマルクス主義の関係について、次のように指摘している。

「レーニンが言った、『マルクスの弁証法は最新の科学的進化論である』(『第二国際的破産〔第二インターナショナルの破産〕』)。マルクスも指摘した、『ダーウィンの著作は非常に意義がある、この本は私がそれを用いて、歴史上の階級闘争の自然科学的基礎と見なすことができる』(ラサール宛てマルクス書簡、1861・1・16)。このゆえに、魯迅はマルクス主義者となって以後、さらに高い角度に立って、さらに科学的態度をもって進化論に対することができた。彼は『ただ進化論だけを信ずる偏り』(『三閑』序言)を正したが、しかし根本的に進化論を否定しなかった。逆に、彼はさらに自覚的に進化論が提供する自然科学の材料を用いて、現実の階級闘争のために奉仕した。」(446頁)

錢理群氏の論旨に沿いながら、後期における魯迅の進化論の意味をさらに具体的に追究したのが、「進化論在魯迅后期思想中的位置——從翻譯普列漢諾夫的《芸術論》談起」(周展安、前掲)であると思われる。「進化論在魯迅后期思想中的位置」(前掲)は次のように該論文の概要を述べる。

「本論は、魯迅が翻訳したブレハーノフの《芸術論》と魯迅の後期における一連の雑文に対する研究をとおして、魯迅が言う、『自分が進化論だけを信ずるといふ偏りを補い正した』とは決して魯迅が完全に進化論を否定したことを意味せず、一方では後期において依然として一つの科学としての進化論に対して肯定的態度をもち、また他方では科学に対する理解を拡げて、マルクス主義思想を主たる内容とする社会科学を自己の思考の重点としたことを、論証する。」

*2:『三閑集』序言(1932・4・24)で魯迅は次のように言う。

「私には創造社に感謝しなければならないことがある。それは彼らが私に幾種かの科学的文芸論を読むように『強要し』、先の文学史家たちが山ほど説明して、なお混乱してすっきりしない疑問を理解するようにさせたことである。このことからさらにはブレハーノフの『芸術論』を翻訳することとなり、私の——私のためにさらに他人にまで及んだ——ただ進化論のみを信ずるといふ偏りを補い正してくれた。」

「魯迅先生兩次回北京」(李霽野、1956・8・25、『魯迅先生与未名社』、湖南人民出版社、1980・7)は次のように、1929年5月北京に帰省したときの魯迅の言葉を伝える。

「或るとき私たちは、すでに組織に参加したのかどうか、彼に尋ねた。彼は次のように言った。別に参加していない、だがマルクス主義は最も明快な哲学だと考える。以前混乱してはつきりさせることができなかつた多くの問題は、マルクス主義の観点から見ると、分かるようになった、と。」

*3：魯迅が1928年頃以降に翻訳した、主なマルクス主義文芸理論の文献には次のものがある。訳了の日付順に、以下にならべる。

- ①『文芸政策』（魯迅訳、「蘇俄的文芸政策」、『奔流』第1巻第1期〈1928・6・20〉から『奔流』第2巻第5期〈1929・12・20〉まで掲載、『露国共産党の文芸政策』、蔵原惟人・外村史郎訳、南宋書院、1927・11、魯迅入手年月日、1928・2・27、のちに『文芸政策』（水沫書店、1930・6、付録の内容を変えて、1930・4・12訳了）
- ②『現代新興文学的諸問題〔無産階級文学の諸問題——原文、中井注〕』（上海大江書舗、1929・4、1929・2訳了、『文学評論』〈片上伸、新潮社、1926・11・5、魯迅入手年月日1927・11・7〉所収）
- ③『壁下叢書』（上海北新書局、1929・4・20、後半部分にマルクス主義文芸理論にかかわる論考が収められる）
- ④『芸術論』（盧那卡尔斯基、上海大江書舗、1929・6、1929・4・22訳了、『マルクス主義芸術論』、ルナチャルスキー原著、昇曙夢訳、白揚社、1928、魯迅入手年月日、1928・9・3）
- ⑤「論文集《二十年間》第三版序」（蒲力汗諾夫、1929・6・19訳、『芸術論』、光華書局、1930・7、「論文集『二十年間』第三版序」、プレハーノフ原著、『階級社会の芸術』、蔵原惟人訳、叢文閣、1928・10・1、魯迅入手年月日、1928・10・10）
- ⑥『文芸与批評』（盧那卡尔斯基、上海水沫書店、1929・10、1929・8・16訳了）
- ⑦『芸術論』（蒲力汗諾夫、魯迅訳、光華書局、1930・7、1929・10・12訳了、『芸術論』、プレハーノフ原著、外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18、魯迅入手年月日、1928・11・7）

また、魯迅は、「『芸術論』訳本序」（1930・5・8、『二心集』）で次のように論じ、プレハーノフを高く評価している。

「プレハーノフはまたマルクス主義芸術理論に基礎をすえた。彼の芸術論は厳然とした一つの体系をなしえていないけれども、方法と成果を含むその残された著作は、後人の研究の対象となるばかりではない。それはマルクス主義芸術理論、社会学的美学を打ちたてた古典の文献と称するに恥じない。」

「第一篇の『論芸術』はまず『芸術とは何か』という問題を提起し、トルストイ

の定義を補正して、芸術の特質を、感情と思想の具体的形象的表現であると断定する。そこで進んで芸術も社会現象であることを表明し、そのため観察するときにも、史的唯物論の立場を用いる必要があるとする。これとは相反する史的観念論 (St. Simon, Comte, Hegel) に批判を加え、またこれらとは相対する、生物の美的趣味に関するダーウィンの唯物論的見解を紹介する。」

*4: 魯迅翻訳の原本を引用する場合、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め、送り仮名はそのままとし、傍点を省略した。以下同じ。

*5: 進化論と史的唯物論に関するプレハーノフのこうした論について、「中国普羅米修斯的精神歷程——『摩羅詩力説』・『苦悶的象徴』・『芸術論』」(伍晓明、『魯迅研究動態』1988年第3期、1988・4・20)、「魯迅対馬克思主義批評伝統的選択」(『中国左翼文学思潮探源』、艾晓明、湖南文芸出版社、1991・7)が指摘している。

*6: 国民性に対する史的唯物論によるプレハーノフの論について、「魯迅対馬克思主義批評伝統的選択」(『中国左翼文学思潮探源』、艾晓明、湖南文芸出版社、1991・7)が指摘している。

*7: 魯迅は、「通訊 (2)」(1925・3・29、『華蓋集』)で次のように言う。

「先生のお手紙は言っております。惰性が現れる形式は一つではない。最も普通なのは、第一は命を天に任せること、第二は中庸である、と。私は、この二つの態度の根本は恐らく、惰性だけですますことはできないであろう、実は卑怯なのだと思っています。強者に出会えば反抗する勇氣もなく、『中庸』ということで誤魔化し、わずかな慰めとする。それゆえ中国人がもしも権力をもち、他人が彼をどうしようもないと知り、あるいは『多数』が彼の護符となるときがあれば、多くは強暴残忍で、あたかも暴君であって、ことを決するのに決して『中庸』ではない。口を開けば『中庸』になってみると、それは勢力をすでに失い、とつくに『中庸』でなければいけなくなったときです。(中略)これらの現象は実際、中国人を廢滅させようのもので、外敵があろうと、なかろうと。もしもこれらを救い正そうとすれば、さまざまな劣った点を先行して暴露し、その立派な仮面を引き裂くよりしかたがない。」(「通訊 (2)」、1925・3・29、『華蓋集』)

ここで魯迅は、中国の民族滅亡をまぢかな危機として意識し、この危機を脱するために、伝統的国民性の悪の代表的な一つである奴隸根性を、そしてその背後にある卑怯な精神を改めなければならないことを説いている。この時期においては、伝統的国民性の悪が第一動因として論じられている。

*8: 「鏗共大観」(1928・4・10、『三閑集』)、「太平歌訣」(1928・4・10、『三閑集』)等において国民性の問題が、第一動因ではないにしろ、旧社会に現存する問題と

して指摘されている。

*9：魯迅は、1926年三・一八惨案以前において、想定される中国変革の過程で武力の必要性を軽んじていたわけではない。『魯迅景宋通信集』一〇』（1925・4・8、『魯迅景宋通信集』、前掲）で魯迅は次のように言う

「改革が最も早いのは、やはり火と剣です。孫中山が一生奔走して、なお中国がこのようであるのは、その最大の原因は彼に党軍がなかったことにあり、このために武力をもつ他人と妥協せざるをえなかったのです。（中略）最大の病根〔国民性の——中井注〕は、目先にとらわれ、そのうえ〈卑怯〉と〈貪婪〉であることです。しかしこれは長い間に作られたもので、しばらく取り除くのが容易ではありません。」

魯迅は、辛亥革命挫折後、1926年三・一八惨案以前において、国民性の改革を最重要課題（第一動因）とし、軍閥支配体制の打倒はその進展とともに提起される課題として考えたと思われる。

*10：「進化論在魯迅后期思想中的位置——從翻譯普列漢諾夫的《芸術論》談起」（周展安、前掲）は、次のように指摘する。

「このため、《芸術論》の本文中であれ、魯迅の評論の中であれ、マルクス主義或いは史的唯物論或いは階級論と、ダーウィンの学説が相矛盾したものであり、そのため前者によって後者を克服したという意味は含まれていない。ダーウィンの学説は唯物史観の反面としてではなく、後者の『準備』として認識され把握された。」

このように、「進化論在魯迅后期思想中的位置」（前掲）は、魯迅後期におけるダーウィンの進化論の意味を、唯物史観の「準備」として捉えている。

「強調する必要があるのは、『生物学から社会学へ』、自然科学から社会科学への転換は、決して自然科学に対する排斥と否定を意味していないことである。魯迅は後期の雑文の中でダーウィンと進化論に多く言及しており、ほとんどそれを自然科学として認識し、同時にまた正面からの肯定的方法で引用している。」（「進化論在魯迅后期思想中的位置」）

*11：革命時代において知識人のなすべきことについて、魯迅は「对于左翼作家聯盟的意見」（1930・3・2講演、『萌芽月刊』第1巻第4期、1930・4・1、『二心集』）で次のように言う。

「言うまでもなく、知識人階層〔原文、知識階級——中井注〕にはやらなければならない知識人階層のことがあり、特に軽視すべきものではありません。しかし労働者階級には決して例外的に、特に詩人或いは文学者を優待する義務はありません。」

せん。』

知識人階層の一人として、魯迅は民衆に対する啓蒙活動を考えていたと思われる。

*12：1926年の三・一八惨案以後、魯迅は中国変革の当面する緊急の課題が、中国人の国民性の改革にあるのではなく、現実に国民性の悪を体現する軍閥政府の打倒、すなわち権力構造の変革にあると認識するようになった。また、軍閥政府と結託する知識人に対する警戒を強めた。この経験は、1927年の四・一二クーデターの体験によっていっそう強められた可能性がある。

現実の反動的権力とそれに結託する知識人に対する警戒について、マルクス主義文芸理論を受容した後に、魯迅は「上海文芸之一瞥」（1931・7・20講演、『文芸新聞』第20期、21期、1931・7・27、8・3、『二心集』）で、次のように言う。

「惜しむらくは現在の作家は、革命的な作家や批評家でさえも、しばしば現実の社会を正視し、その仔細を知り、とりわけ敵の仔細を認識することができない、或いはそうする勇気ないのです。ついでに例を一つあげましょう、以前の『列寧青年〔レーニン青年の意——中井注』』に中国文学界を評論する文章があり、それを三派に分けていました。第一に創造社で、無産階級文学派として最も長く論じ、その次は語絲派で、小資産階級文学として短く述べてあります。第三は新月派で、資産階級文学派として、さらに短く述べ、一頁にもなりません。これは次のことを示します。この青年批評家は敵であると認識するものであればあるほど、ますます言うべきこともなく、すなわち仔細に見ていないのです。（中略）もしも戦う者であるならば、革命と敵を理解するうえでは、むしろ当面の敵をより多く解剖しなければなりません。文学作品を書こうとするときも同じです。革命の実際を知らなければならぬだけでなく、深く敵の状況、現在の各方面の状況を知り、それから革命の前途を判断しなければなりません。」

*13：前述のように、1928年以降マルクス主義を本格的に受容する中で、魯迅はブレハーノフの国民性に関する見解を学んだと思われる。

「魯迅提出改造“国民性”及其認識的發展」（胡炳光、『魯迅“国民性思想”討論集』、鮑晶編、天津人民出版社、1982・8）は、「沙」（1933・8・15、『南腔北調集』）における、前期とは異なる史的唯物論の考え方を指摘している。

「習慣と改革」（『萌芽月刊』第1巻第3期、1930・3・1、『二心集』）で魯迅は、「真の革命者」レーニンの言葉を引用して、改革をはばむ風俗・習慣の巨大な力を指摘する。魯迅は、中国改革のために民衆の中に入って、風俗・習慣を研究する必要のあることを言う。風俗・習慣は、歴史的社会的に民衆の中に形成された

という意味で、史的唯物論の理解であると思われる。

*14：魯迅は『『二心集』序言』（1932・4・30）で次のように言う。

「ただもともとはこの熟知した階級を憎悪し、いささかもその滅亡を惜しまないだけであった。のちにまた事実の教訓によって、ただ新興の無産者にだけ将来があると考えるようになったのは、確かである。」

本文の変革主体とは「新興の無産者」よりも広い範囲の労働者、農民、勤労市民を含めて想定して、ここでは使用している。

*15：馮雪峰は、『回憶魯迅』（人民文学出版社、1952・8、底本は、『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉）で、1929年に魯迅が階級が存在について、1927年4月12日の反共クーデターを振りかえりながら、次のように述べたことを伝える。

『『階級闘争は、人が承認しなくても良い。事実の教訓は必ず理論の宣伝より有力です。』

『階級闘争は、確かに人を驚かせ寝食を不安にさせるでしょう。しかし誰がまず階級闘争を実行するのか。口先で宣伝する人ではなく、口には言わず、世の中に階級闘争があることを承認しない人です。革命者ではなくて、手に刀をもった反革命者です。』